新聞定価 朝夕刊月ぎめ 3,925円(本体価格 3,738円、消費税 187円)・1部売り(税込み)朝刊 150円、夕刊 50円　第3種郵便物認可

ギョギョ クニマスだ

さかなクン お手柄

「絶滅」とされていた秋田県田沢湖のクニマスが、山梨県の西湖でみつかった。クニマスの絵を残したい――。そんな思いが、「奇跡」を引き寄せた。「絶滅」を悲しみ、捜し続けていた田沢湖畔の人たちは、遠い地で移入種としてひそかに70年の歳月を過ごしていたことに、「信じられない」「世紀の大発見だ」と驚きの声を上げた。

（中山由美）＝1面参照

西湖でみつかったクニマスとさかなクン＝9月

クニマスと田沢湖

田沢湖は面積26平方キロメートル、最深423㍍の日本一深い湖。かつては沢水以外に流れ込む川はなく、透明度は極めて高かった。クニマスをはじめ、スナヤツメやイワナ、サクラマス、アユ、ウグイが生息していたが、1940年に玉川の酸性水が流れ込み、1年足らずで姿を消した。

89年から玉川の中和処理が始まり、田沢湖の水の酸性度も下がって、放流したウグイが生息している。

70年前に絶滅したと信じられていたクニマスの再発見の立役者は、さかなクン（東京海洋大客員准教授）だった。

漁師と船に乗り、珍しい魚を見つけると、京都大総合博物館の中坊徹次教授に教えを請うていた。その中坊教授の部屋を訪ねたのは今年3月。「どう見てもクニマスじゃないかと思うんです」と保冷箱から2匹を取り出した。

中坊教授の表情が一瞬にして変わった。「なんやこれは！」。20㌢ほどの黒ずんだ体がオリーブ色に輝いていた。

長年、クニマスを研究してきた中坊教授は旧知の仲であるさかなクンに「クニマスを描いてほしい」と頼んでいた。現存する標本は約20匹。白か茶色に変色している。田沢湖周辺でも、生きていたクニマスの姿を記憶する人は今や数人。できるだけ正確に再現したかった。

さかなクンはイラストレーターでもあり、ウロコやヒレの数までこだわり、正確に描くことでも知られる。京大にある標本を、前、後ろ、横、上、下の5方向から観察して詳細にスケッチした。だがホルマリン漬けでは、ひれやウロコがわからにくい。「ヒメマスと比べたら」と中坊教授に言われ、知り合いの漁師に頼んで北海道の湖や富士五湖から送ってもらった。

西湖から届いた保冷箱を開けると、二十数㌢の魚が4匹。ヒメマスなのに、「なんで黒いんだろう」。傷んでいるのかと思ったが、新鮮だ。そこで、京大へ持って行った。

中坊教授は仰天した。腹に卵を持つ個体もいる。ヒメマスの産卵は秋ごろで、体は銀色だ。「ヒメマスなら今の時期に産卵しない。これはクニマスだ！」

クニマスは田沢湖の固有種だが、かつて西湖に卵が送られたとの記録が残る。さかなクンと中坊教授は4月、一緒に出かけた。湖の中ほどで刺し網をあげると、最後に黒い魚が1匹あがった。「ひえーっ。クニマスだ！」とさかなクン。漁師は「前に釣りあげたことがあったが、ここでは『クロマス』って呼んでいる魚」と話した。

ふるさとも「まさか」

秋田・田沢湖畔の人々

西湖村漁協から届いたはがきを見る三浦久さん＝秋田県仙北市の田沢湖畔の自宅、いずれも中山写す

「まさかクニマスが生きていたとは」――。秋田県の田沢湖畔に代々住み、クニマスを研究していた故三浦久兵衛さんの長男久さん(61)は「すごい！　世紀の大発見ですね」と喜んだ。

湖畔に住んでいた仙北市の大山文穂さん(78)は「正月に焼いて食べたのがおいしかった」と懐かしむ。「1匹、米一升」と言われた高級魚だったが、1935年の漁獲量は8万8千匹近くあった。

「父が生きていたらどんなに喜んだことか」と久さん。クニマス漁をしていた父の久兵衛さんは「網を引き揚げる時の手の感触、キラキラ光る感じが忘れられない」と話した。

玉川の酸性水を湖に入れれば、魚は死ぬと漁師たちはわかっていた。だが、「食糧増産と経済発展が最優先された時代。反対の声はかき消されたのだろう」と久さんはいう。

クニマスが消えた後、久兵衛さんはクニマスが西湖や本栖湖へ放流されていた記録をみつけた。35年の消印で、田沢湖孵化場から送ったクニマスの卵の到着を知らせる西湖村漁協のはがきが、今も久さんの元にある。

クニマスを研究してきた杉山秀樹・秋田県立大客員教授は「他の湖で生き残っているかも」と期待し、クニマス捜しを仕掛けた。95年から3年間、当時の田沢湖町観光協会が懸賞金500万円を掲げて呼びかけた。各地から送られてきた魚は久兵衛さんと鑑定したが、見つからなかった。

杉山教授は「田沢湖のクニマスが絶滅したのは事実。いわば国内産外来種だ」と受け止める。「田沢湖ではもうすめない。貴重な固有種を人間が絶滅させた間違いを二度としてはならない」